

2000年「第1回森づくりフォーラム」開催に向け作成した「地区カルテ」より抜粋

2. 幸区の現状と課題

(人口)

幸区の人口は平成7年現在で約139万人であり、人口密度は1ha当たり138人で市内では最も高い値を示している。(ちなみに、東京都区部128人、大阪市118人、川崎市84人である。) その中で、高齢者数は15年間で2倍になり、全人口に対する構成比は市平均の10%を2.3ポイント上回る12.3%になっている。また、高齢者のみの世帯は年々増加し、約半数の48.1%に達している。一方、子供の数は15年間で3人に1人から5人に1人に減少している。

このようなことから、人口密度の高い幸区では日常生活において憩え、やすらぎ、人々が出会い、交流できるコミュニティ空間の整備が一層求められる。同時に、地震等の災害時には他区より多くの人的・物的被害を受けることが予想されるため、それに対応するまちづくりが急務である。また、高齢者世帯が約50%に達するため、その世帯を地域でどのように支えていくか、高齢者が地域参加しやすい場づくりなどを意識したまちづくりが求められる。

(環境)

幸区の緑環境を見ると、公園緑地面積は人口が同規模の麻生区と比較すると3分の1の36.59haであり、一人当たりの面積は僅か2.68㎡で川崎市の平均4.51㎡より大きく下回っている。緑のオアシスである夢見ヶ崎公園(約6.6ha)は、生態系としての緑は減少し、また、御幸公園(約3ha)も半分は野球場で植物相としては貧弱である。一方、農地を見ると生産緑地指定を受けた農家は8軒で、面積は0.8haにすぎない。このような緑空間の激減により動植物が棲みにくい環境になり、身近にいた小動物が絶滅の危機に瀕している。

緑環境は、人々にやすらぎを与え、空気の浄化作用を有し、災害時には延焼の遮断や避難場所としての役割を果たし、更に「生きた環境教育の場」になるなど、さまざまな機能を持っている。そのため、生態系としての森や農地を創出し、緑の質を高めることが求められる。

(防災)

兵庫県南部地震級の地震が発生すると市内の死者・負傷者数の70%が幸区を含む南部3区に集中すると予想されており、幸区における長期避難者は21,600人発生し、その中83%の18,000人が日吉地区に集中するとされている。その時に罹災者を収容するための仮設住宅は2,414戸が必要とされる。

高密度の人口、木造建物の集中そして著しく少ない緑空間で形成されている幸区は、防災に強いまちづくりが急務の課題である。そのためには建物の不燃化、街路の拡幅、市街地の緑化等々の整備、再開発が必要であるが、これには莫大な費用と時間がかかることから、現在あるオープン・スペースの有効利用を進めることがより現実的である。例えば、特に、延焼被害の大きい日吉地区や操車場周辺住民の避難場所の確保、延焼遮断機能を持った防火樹林帯の整備、さらに災害時の仮設住宅建設場所などが求められ、その空間として操車場跡地の活用を積極的に考える必要がある。